

## その他

# 文系学部的女子大学生を対象とした健康教育 －コンドームスキル演習の導入－

Health education for female students majoring in humanities  
－ Introduction of the condom skill practice －

江島 仁子<sup>1)</sup>、森 圭子<sup>1)</sup>、安藤 布紀子<sup>1)</sup>

Hitoko Ejima<sup>1)</sup>、Keiko Mori<sup>1)</sup>、Fukiko Andou<sup>2)</sup>

### 要旨

女性の健康問題とセルフケアのあり方を学ぶ講義の中で、コンドームスキル演習を導入し、その教育効果について報告する。対象はA女子大学文系学部在籍し、当講義を履修していた学生132名である。コンドームスキル演習を実施した後に、学生が自由記述した感想を分析した。約半数の学生は、「実際に体験できて、いい勉強になった」「自分を守るために大切なことである」「男性任せでなく女性も知っておくべきことである」「有益な学びが出来た」など肯定的な感想を述べていた。その他、コンドーム自体に関する感想やコンドームを男性器模型に装着したことへの感想などがあった。学生はコンドームスキル演習により、コンドーム取り扱いの注意点や正しい装着の難しさから、確実な避妊について考える機会となっていた。加えて、コンドームによる避妊の主体性のあり方、性交相手となる男性に対する姿勢、自分自身を守ることへの自覚など、多くの学びを得ていた。また、少数ではあるが、性交に対する忌避感や演習への羞恥心を記した感想があった。コンドームスキル演習を取り入れた講義は、多くの学生にとって有益であったが、性交に関する事柄に対して抵抗感が強い者が存在することを考慮した講義運営が必要であると示唆された。

キーワード：コンドームスキル、健康教育、女子大学生

## I. はじめに

世界各国で実施されている避妊法は様々であるが、日本においてはコンドームによる避妊が非常に多い。2014年の「第7回男女の生活と意識に関する調査」によると、性交の際に避妊を行っている女性の85.5%がコンドームを使用している<sup>1)</sup>。コンドームの使用は増加傾向にあり、第1回調査(2002年)の70.8%から14.7%増となっている。コンドームは一般的な使用をした場合、1年間の失敗率(妊娠率)は15%とやや高いものの、適切な使用をした場合は2%であり、高い避妊効果が得られる<sup>2)</sup>。また、性感染症予防のためにも、コンドームの正しい使用が最も有効な方策の一つであるといわれており、そのためコンドームがあまり普及していない欧米諸国でも、性感染症予防のためコ

ンドームの使用を積極的に推進している<sup>3)</sup>。我が国の高いコンドーム使用率を維持するために、性教育でコンドームについての教育を行うことは効果的である<sup>4)</sup>とされている。

そこで、助産師であり大学教育の一端を担う者として、文系学部在籍する女子大学生に対し、コンドームの管理方法や装着の手技など、知識だけでなくより具体的なコンドームスキルを導入した教育実践を行った。受講した学生の感想より、どのような教育効果が期待できるのかについて報告する。

## II. 教育実践方法

### 1. 対象者

A女子大学文系学部在籍し、研究者が担当す

<sup>1)</sup> 四條畷学園大学看護学部 Faculty of Nursing, Shijonawate Gakuen University

<sup>2)</sup> 甲南女子大学看護リハビリテーション学部 Konan Women's University

表 1 具体的な講義スケジュール

講義回数	講義内容
1回目	本講義を学習する意義
2、3回目	月経講座： 月経の仕組み、月経時のセルフケア、月経に伴う健康トラブル
4回目	女性のライフサイクル
5～9回目	産む性の責任： 妊娠・出産・子育て、望まない妊娠を避けるために、避妊に失敗したとき、喫煙・薬物の影響、性感染症とその予防
10～13回目	女性の人権： 男女のセクシュアリティ、性暴力、性暴力の被害にあったら、不妊
14、15回目	女性のライフサイクルと健康問題： 食事・運動・ダイエット、不足しがちな栄養素と健康問題、女性に多くみられるガン、更年期の健康問題

る講義を履修した学生 205 名のうち、調査協力への同意が得られた 132 名である。

## 2. 講義の概要

文系学部の主に 1 年次生を対象とした前期開講の選択科目であり、15 回 1 単位の講義である。講師は看護学部所属する教員 3 名がオムニバスで担当し、3 名とも助産師である。講義では現代女性の健康問題を取り上げ、自身の心と身体に関心を持ち自分の健康を自己管理できるようになることを主なねらいとした。

毎回の講義の始めに、講師がテーマを提示し、学生はそれに対する自分自身の考えや意見を自由記述し提出（10 分間）としていた。同時に講義に対する質問を設けており、翌週、質問に対しての回答を行う双方向的な講義としていた。なお提出する用紙は出席表を兼ねていたため記名式としていた。

## 3. コンドームスキル演習を取り入れた講義

コンドームスキル演習は第 5 回「産む性の責任：望まない妊娠を避けるために」で実施した。初めに日本における避妊法の特徴、ライフステージにおける避妊法の適性、避妊の失敗率などを講義し、その後にコンドームスキル演習を実施した。コンドームスキル演習は、①コンドームの適正な使用方法、使用上の注意点などについての説明、②講師によるコンドームスキルのデモンストレーショ

ン、③学生によるコンドームスキル演習の実施（学生全員にコンドームと男性器模型を配布、コンドームの取り出し、手にとっての確認作業、男性器模型への装着と取り外し、コンドームの後始末）について実施した。

翌週、講義を履修している学生は講義の始めに『コンドームスキル演習を実施した感想』を記述し提出した。なお、本講義でのコンドームスキル演習は男性器にコンドームを装着し女性器に挿入する「性交」を前提としている。そのため、学生の記述で使用されている「性行為」や「性交渉」といった語句は「性交」で統一した。

## 4. 倫理的配慮

学生には、1. 調査目的、2. 記述された内容は個人が特定されないようにデータ処理をすること、3. 調査への協力は自由であり成績評価には関係しないこと、4. 調査結果を実践報告として発表することについて、口頭及び書面で説明し、同意書の提出をもって同意を得たものとした。なお、実施に際しては、A 女子大学研究倫理委員会の承認を得た。

## Ⅲ. 結果

### 1. 対象者の概要

対象者 132 名の内訳は、1 年生 122 名（92.4%）、2 年生 6 名（4.5%）、3 年生 2 名（1.5%）、4 年生 2

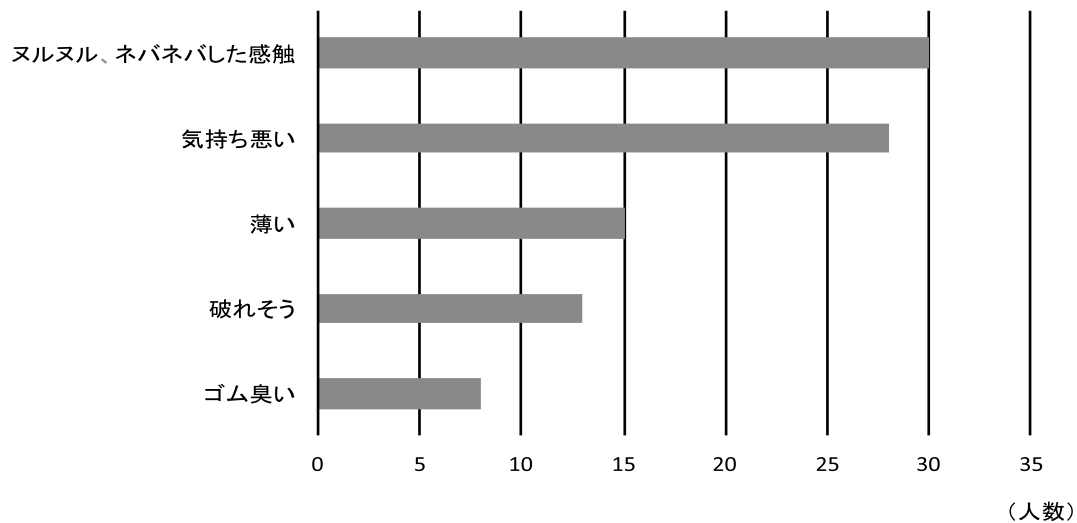


図 1 コンドーム自体に関する感想

名 (1.5%) であった。

## 2. コンドーム自体に関する感想 (図 1)

コンドームそのものの感想を書いていたのは 53 名 (40.2%) であった。内容は、ヌルヌル・ネバネバするなどコンドームの感触 (30 件)、ゴム臭い (8 件)、薄い (15 件)、破れそう (13 件)、気持ち悪い (28 件) であった。53 名の中で、7 名は単なる感想のみであったが、46 名は『想像以上に薄く破れやすそう、だから絶対に避妊が出来る訳ではないことが分かった。』『ヌルヌルして実際にモデルに付けることは難しかった。授業では部屋が明るかったので付けることが出来たが、本当に性交するときに暗かったりしたら上手く出来るのか少し不安になった。』『臭くてヌルヌルしていて気持ち悪いと思った。でも実際はそんなこといってられないと思う。普段練習する機会はないので、いい経験が出来た。』など、コンドームに対する感想から自身の考えや気づきまでを記述していた。

## 3. コンドーム装着に関する感想

コンドームを男性器模型に装着した感想を書いていたのは 38 名 (28.8%) であった。30 名は装着が難しかった、上手く装着できなかったとし、8 名は簡単だったとしていた。装着が難しかったとした者は、『注意することが多く、付けるのも難しかった』『空気を抜いて付けることがあまり上手く出来なかった』『コンドームを正しく付けるのは難しいと感じた』など、ただ単に装着するだけでな

く注意点を守った上で正しく装着することの難しさに気付いていた。簡単だったとした者は『案外と簡単だった。簡単なことなのに、きちんと付けずに、男性が無責任だと望まない妊娠をしてしまうのだと思った。』『実践してみて思ったより簡単だったが、任せっきりは良くないと思った。』など、コンドームを装着する男性への思いや男性に一任することへの危うさを述べていた。

## 4. 肯定的な受講の感想 (表 2)

コンドームスキル演習を受講し、有益な学びが出来たなど肯定的な感想を記述した者は 66 名 (50.0%) であった。内容は、1) 実際に体験できていい体験になった、2) 自分を守るために大切なことである、3) 男性任せでなく女性も知っておくべきである、4) コンドームの使用について正しい知識を学べた、5) 不安の解消になった、に分類することができた。

### 1) 実際に体験できていい勉強になった (36 例)

学生の感想から、今回のコンドームスキルのような演習経験の有無は確認できなかったが、情報・知識レベルでのコンドームをスキルとして体験したことを大切なこと、貴重なことなどと捉えていた。

### 2) 自分を守るために大切なことである (14 例)

コンドームスキル演習により、避妊・性感染症予防のためのコンドームを再認識していた。自分の身体を自分で守るために、性交時にコ

表2 コンドームスキル演習に対する肯定的な受講の感想（複数回答）

n=66名

カテゴリー	自由記載の内容
実際に体験できていい勉強になった（36名）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際は色々違うと思うが、事前に模型でも一度は経験しておくことは大切だと思う。</li> <li>・このような機会はこれからのと思うので、とても貴重な経験だと思った。</li> <li>・最初は少し抵抗があったが、避妊には大切なことなのでいい経験になった。</li> </ul>
自分を守るために大切なことである（14名）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めてコンドームをみて、いい気分にはならなかったが、このような知識を知っておくだけでも相手の行動を確認できるし、やはり自分を守るためである。病気も望まない妊娠もしたくないので学べて良かった。</li> <li>・コンドームをみるのも触るのも初めてで、最初はとても嫌だったが、コンドームを付けるということは将来自分を守ることに繋がると思うと、とても大切な講義だったと思う。</li> </ul>
男性任せでなく女性も知っておくべきことである（11名）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンドームの使用に関しては男性に責任があると思っていたが、私自身も付け方を理解し、男性だけに任せるのは良くないことだと実感した。</li> <li>・初めてやってみて相手にばかり任せるのではなく、自分も気かけなければいけないと知った。授業で習えるって貴重な体験だなと思った。</li> <li>・相手任せにせず、自分でしてあげられるようになりたいと思った。</li> <li>・コンドームは男性が管理するだけではいけないと再確認した。</li> </ul>
コンドームの使用について正しい知識を学べた（6名）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いずれ必要になることなので、正しい付け方を教えてもらってためになった。</li> <li>・ネバネバしていて少し抵抗があったが、こういう大切な指導は普通してもらえないので、教えてもらえて良かった。</li> <li>・初めてコンドームについて学んだ。正直、少し触りにくかったが、自分が使用することになったときのために、正しい使用方法を知っておくことが出来て良かった。</li> </ul>
不安の解消になった（3名）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に実施できてすごく良かった。これからのためにもなるいい経験をさせてもらい感謝している。友人や親にも自分からは聞けなく不安に思っていたが、授業を通して詳しく教わったので安心した。</li> <li>・最初は衝撃だった。したことがなかったので、扱いが分からずあたふたした。あのままだったら破れていたと思う。しかしとてもいい経験になった。いざという時のための備えが出来たし、不安が多少解消された。自分の身を守るためにもしっかり覚えていきたい。</li> </ul>

ンドームを装着するべきであるという考えに至っていた。

3) 男性任せでなく女性も知っておくべきことである（11例）

実際にコンドームを装着するのは男性であるため、男性に責任がありコンドームの装着や管理は男性任せという考えを改めていた。コンドームの装着や管理を相手任せでなく女性も気にかけるべき、女性も責任の一端を担うべきとの考えに至っていた。

4) コンドームの使用について正しい知識を学べ

た（6例）

コンドームの正しい使用方法を学ぶことは男性だけでなく女性にとっても大切で必要なことであると認識していたが、具体的に学ぶ機会に出会えていなかった。そのため、今回のコンドームスキル演習は、学生の学びのニーズと一致したものとなっていた。

5) 不安の解消になった（3例）

コンドームについて親や友人に質問することができずに不安に思っていたり、触ったり熱かった

りしたことがないため不安に感じている学生が存在した。これらの学生にとっては、コンドームに関する正しい知識の提供と演習によって、抱いていた不安の解消につながっていた。

#### 5. コンドームを装着する男性への思い（17名）

実際にコンドームを装着する男性に対して様々な思いを抱いていた。最も多かったのが、『彼氏に付ける自信はない。だから彼氏は付けるのが当然の人でないと私は自分を守れないと思った。』

コンドームを正しく付けるのは難しいと感じた。実際使用している人で、正しく付けることが出来ている人はいるのか疑問に思う。』『コンドームを付けることは男性の役目だと思うが、付け方を間違えてそのまま妊娠してしまわないように、女性もこのような知識を得ておくことは良いと思った。』『女性が自分の身は自分で守ることは大事だが、やはりモラルとしてのコンドーム装着を男性にもっと考えてもらいたいと思う。』など、正しい知識、技術を持ってコンドームを付けて欲しいという男性への希望であった。

その他、『実施するだけで避妊できるのに、何故拒む男性がいるのかなと思った。』とコンドーム装着を拒否する男性に対して疑問を呈する者、『男性はこの知識をどこから得ているのか不思議に思った。』と男性がコンドームスキルを学習する機会について疑問に思っている者、『性交をするときが来たら、彼氏に避妊することを言いたい。』とコンドーム装着を要求する意志を強く持った者などであった。

#### 6. 性交への忌避感（2名）

2名と少数であったが、性交に対しての忌避感のみを記している者がいた。1名は、『あまり触りたくなかったし、気持ち悪かった。慣れてないので使いにくかった。コンドームは女性が付けるのではなく、男性自身でやるべきだと思う。避妊するなら性交をしない方が良いと思うし、コンドームは使いにくくて失敗すると思う。』と性交の意義を生殖性に限定して捉えていた。もう1名は、『正直気持ち悪かった。絶対に入らないと思った。』と男性器模型から想像したであろう現実的な性交への忌避感を抱いていた。

## IV. 考 察

### 1. 大学生を対象とした性教育

一般的に、大学は高校までの学生生活に比べ講義の選択や服装、アルバイトなど自由度が格段に増し、男女交際を含めた交友関係の広がりから性行動も活発になってくる。大学生を数見<sup>6)</sup>は「性的に自立する自己決定の年代」としており、性をより身近に考える機会の増える大学生の時期に行う性教育は、学生にとって身近で現実的な内容となり、より高い効果が期待できると考える。実際に、今回のコンドームスキルを受講した学生の半数が、有益な学びが出来たなど肯定的な感想を述べていた。また、医療系学部と異なり性に関する正確な知識を得る機会が少ない文系学部の学生が対象であることも意義があると考えられる。日本における未婚女性の年代別性交経験率の推移をみると、10歳代（18～19歳）は20.5%と未経験者の割合が高い。しかし、20歳代前半（20～24歳）では48.9%と、性交経験率が急増している<sup>5)</sup>。最初の性交経験時よりコンドームを装着することで、避妊、性感染症予防の効果が期待される<sup>4)</sup>ため、コンドームスキル演習を含めた性教育は性交を経験する前、遅くとも大学1年生までに行うことが望ましいと考える。

### 2. コンドームスキル演習による学び

学生は、コンドームを実際に触りモデルに装着することで、コンドームの薄さ、爪での破損に気を付けなければならないこと、付着しているゼリーがヌルヌルして滑りやすいこと、裏表があること、などの注意点があること、それらの注意点を守った上での装着の難しさを実感していた。知識だけを提供する性教育よりも、具体的なスキルを取り入れた演習による教育の方が有効であることは以前より報告されている<sup>7) 8) 9)</sup>。実際に、学生はコンドームスキルを学習したことによって、コンドームによる避妊の主体性のあり方、コンドームを装着する男性への思い、自分自身を守ることへの自覚など、様々な気づきを得ていた。

コンドームが避妊の主流である日本において、避妊は男性が主体的に取り組むべきとする意識が多くを占めている<sup>10)</sup>。今回の感想からも『コンドームの使用に関しては男性に責任があると思っていた。』『コンドームを付けることは男性の役目』『コ

ンドームは男性がするものだから自分が触るとか考えていなかった。』など、コンドームによる避妊は男性が主体であるとの考えが多数であった。ただ、コンドームを使用しない性行為の結果、生じる不利益は妊娠にしても性感染症にしても、男性より女性の方が甚大である。男性は性行動への興味や関心は高いが避妊や性感染症などへの意識は低く、性行動に伴うリスク対処への意識が低い<sup>11)</sup>とされており、コンドームへの使用行動やニーズには男女差があり<sup>12) 13) 14) 15) 16)</sup>、概して男性の方が女性よりもコンドームの使用には消極的である。

今回の感想から、コンドームによる避妊を男性だけに任せるのではなく、女性も知識や技術を知るべきであるという避妊に対する意識の高まり、自分の身は自分で守るという性行動に伴う責任の高まりが認められた。

コンドームの装着や所持に関してであるが、『相手任せでなく女性である自分が装着できるようになりたい』『コンドームは男性が管理するだけはいけないと再確認した。』と、より積極的に避妊の主体を担おうとする感想がみられた。コンドームの使用に影響を与える因子として、男女差以外に、コンドームを付けるタイミングがあり、タイミングを逃さずに女性がコンドームを付けるというスキルはコンドーム利用率を上げると報告されている<sup>17)</sup>。また、装着のタイミング以外にも、コンドーム所持の有無が利用率に影響しているとされていた。今回の講義では、コンドームに関する知識とスキルに重点を置いていたが、女性がコンドームを所持し適切なタイミングで装着すること等、より積極的なコンドームへの関与、すなわち女性が主体的に使用することについても講義内容に含めることを考えてみたい。

男性に対しては、『コンドームを付けるのが当然』『モラルとしてコンドームを付けるべき』など、コンドーム装着が性交をする上での必要条件としており、『性交をするときは彼氏に避妊することを言いたい。』と避妊の意思表示を明確に行うとした記述がみられた。男性との関係性によっては、女性がコンドーム装着を希望しても男性の協力が得られない場合がある<sup>13) 18)</sup>。また、コンドームの使用頻度が低い男性は、高い男性よりも過去の性交相手の人数が多く、愛情のない性交を容認し、性交

に対して開放的であるとされている<sup>14)</sup>。性交相手が多いほど性感染症のリスクが高くなることは周知の事実である。コンドームを使用した性交を確実にするためには、女性が確固たる意志を持って相手に交渉、要求することが大切である。正しい知識、技術を得ることは無責任で危険な性行動にブレーキをかけることにつながると考える。

### 3. 性交への忌避感

人間の性には、生殖性以外にも快楽性や連帯性、親密性など様々な意義があるが、性に関する事柄に対して抵抗感が強い者が存在するのも事実である<sup>19)</sup>。「第7回男女の生活と意識に関する調査」<sup>1)</sup>によると、『性交渉することに、「関心がない+嫌悪している」割合』は16～19歳女性で65.8%と半数以上を占めている。この年代は性行動が活発になりつつある一方で、身近に感じる性交への嫌悪感を抱く者も多い、いわゆる‘間の世代’であることに留意する必要がある。今回、性交に対する忌避感のみを記していたのは132名中2名と少数であった。これは、コンドームスキル演習を実施する以前に、月経を含めた女性の身体と生理、女性のライフサイクル、妊娠・出産・子育てや避妊など、産む性としての責任のあり方についての講義がなされており、ある程度、学生のレディネスが整っていたからであると考えられる。また、性交への忌避感を抱いたとしても、後に続く講義で十分にフォローすることが可能であった。もし、性教育として単発の講義である場合は、学生のレディネスが整っておらず、後のフォローもしにくい状況も考えられるため、十分な注意が必要である。

また「恥ずかしい」と記述した者が2名存在した。今回、女子大学だったため、受講者は女性のみであり、リアルなイメージを喚起する男性器模型とコンドームを使用しても真面目に演習を行っており、多くの学びを得ていた。性に関する事項は羞恥心を伴うため、講義の環境は重要である。

思春期にある男性は自意識が高く性的に興奮しやすいため、落ち着いて真面目に考えることが難しい<sup>19)</sup>ため、受講者が男女混合の場合は、今回のようなコンドームスキル演習を含めた講義は実施が難しいと思われる。

## V. おわりに

女子大学生を対象にコンドームスキル演習を交えた講義を行った結果、コンドームによる避妊の主体性のあり方、性交相手となる男性に向き合う姿勢、自分自身を守ることへの自覚など学生は多くの学びを得ており、概ね肯定的に受け止められていた。なかには性交への忌避感や講義への羞恥心を示した者が存在した。大学1年生という年代、医療系学部と異なり性的な事柄について触れることの少ない文系学部であることから、講義の環境や学生のレディネス、講義後のフォローには十分留意する必要があることが示唆された。今後も教育に関わる助産師として、助産実践から得られた性行動や避妊、妊娠・出産、性感染症など現実的な情報や知識・技術を活かした教育を実践していきたい。

(本報告の一部は、第53回日本母性衛生学会学術集会にて発表した)

## 文 献

- 1) 一般社団法人日本家族計画協会編：第7回男女の生活と意識に関する調査報告書2014年－日本人の性意識・性行動－，2015.
- 2) 日本産科婦人科学会編：低用量経口避妊薬の使用に関するガイドライン，第2版；5，2005.
- 3) 長宗典代：変化ステージ理論を用いたエイズ予防行動学研究－コンドーム使用行動に焦点を当てて－，日本エイズ学会誌，6；37-41，2004.
- 4) 井上栄：グローバル時代の感染症に備える，予防時報，215；8-13，2003.
- 5) 国立社会保障・人口問題研究所編：第15回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査），2016.
- 6) 数見隆生：10代の性をめぐる現状と性の学力形成；170-172，かもがわ出版，2010.
- 7) 福島裕子：若者の自主企画による性の健康とセクシュアリティに関する情報発信の効果，岩手県立大学看護学部紀要，11；59-70，2009.
- 8) 林桐代，町浦美智子，佐保美奈子：大学生の性行動およびライフスキルの実態，大阪府立大学看護学部紀要，18(1)；45-55，2012.
- 9) 増田安代，今村恭子：高校生性の教育に関する課題を探る－学校と家庭で享受した性教育と性への認識調査を通して－，九州看護福祉大学紀要，7(1)；79-88，2005.
- 10) 内閣府編：少子化社会に関する国際意識調査報告書，2006.
- 11) 西頭知子，佐々木くみ子：日本の若者の性とセクシュアリティ教育の現状に関する文献検討，大阪医科大学看護研究雑誌，1；34-42，2011.
- 12) 尼崎光洋，清水安夫，森和代：コンドームの使用行動に対する意思決定バランス尺度の開発，思春期学，27(4)；333-341，2009.
- 13) 伊藤美栄，上垣まどか，遠藤弘恵，他：女性からみたパートナーとのジェンダー認知の差異とコンドームネゴシエーションの関連，母性衛生，53(1)；134-141，2012.
- 14) 福本環：男女大学生の性交渉に対する態度－性差、コンドームの使用頻度の差からの検討－，思春期学，23(1)；171-178，2005.
- 15) 新田真弓，村上明美，大石時子，他：大学生の性交や避妊行動の決定と性役割態度の関係（第1報）－性別による比較を通して－，思春期学，25(3)；315-320，2007.
- 16) 村口喜代：人工妊娠中絶患者とそのパートナーに対する「コンドーム使用に関するアンケート調査」－ジェンダーの視点からの検討－，日本性科学会雑誌，25(1)；15-25，2007.
- 17) 大石時子，前田ひとみ，鶴田来美，他：大学生男女間のコンドーム使用の実態および性差を視点にしたコンドーム使用に影響を与える要因，思春期学，24(2)；359-369，2006.
- 18) 永松美雪，矢野潔子，原健一：避妊行動および避妊の意思決定に関する研究－女子大生および既婚の就労女性とパートナーの要因－，母性衛生，54(4)；519-529，2014.
- 19) 伊藤弥生：大学生の恥づかしさと心理的安全感の問題に留意した性教育，日本性科学会雑誌，31(1)；77-87，2013.